

平成 21 年度

横須賀美術館 評価報告書（試行案）

平成 22 年（2010 年） 月 日

横須賀美術館評価委員会

①美術を通じた交流の促進

a.年間観覧者数

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	87,034人	106,520人	165,961人
評価	—	B	A

【評価指標】10万人

A：11万人以上

B：10万人以上

C：10万人未満

年間観覧者数10万人は計画段階からの目標。開館の年には自ずから注目を浴びるため、160%の達成率となった。これは別格として、2年目にも目標を達成し、3年目となる今年度もほぼ達成する見込みとなっている。人口密集地から離れ、交通の便もけっして良いとは言えない立地としては、かなり健闘しているものと自己評価したい。

b.年間来館者数

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	196,267人	246,337人	386,175人
評価	—	A	A

【評価指標】20万人

A：22万人以上

B：20万人以上

C：20万人未満

年間来館者数は、展覧会を目的としない来館者を含めた、美術館を中心とする賑わいを示す指数と考えられる。

c.市民／全体の比率

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	30.4%	36.8%	22.8%
評価	B	A	C

【評価指標】40%に近づける

A：35%以上 45%未満

B：30%以上 50%未満

C：30%未満 50%以上

横須賀美術館の性格は、市民が美術に親しむための社会教育施設という側面と、市内外の交流を促進する観光施設という両面がある。アンケートを分析する限り、（児童生徒造形作品展をのぞく）通常の企画展開催中の市民率は20%～30%程度で推移している。展覧会の性格にも左右されるが、この数値からは、観光施設として認知される傾向が強い現状が見てとれる。今後、市民のなかに美術への関心が高まっていくに従い、市民率は漸増してゆくことが予想されるため、目標を40%とやや高めに設定している。また、交流促進という性格が失われるのは望ましくないため、目標値を大幅に超えることについても評価を低くする。

d.パブリシティの状況（雑誌・新聞からの認知率）

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	14.5%	17.2%	27.2%
評価	C	C	A

【評価指標】20%

A：25%以上

B：20%以上

C：20%未満

開館年度は自ら注目度が高く、新聞、雑誌に取り上げられる機会も多かった。限られた広告費の中で、こうした出版物への露出は認知度を上げるための重要な手段であり、今後もより積極的な情報提供をしていくべきである。なお、認知媒体についてのアンケートで最

も多い回答は友人、知人からの紹介であり、来館経験者が当館の認知に大きく貢献しているといえる。今後は、このあたりを考慮した周知を考える必要がある。

e.アクセス満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	82.9%	未調査	未調査
評価	A	—	—

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

立地条件から、当初からアクセスについて懸念されていたが、21年度よりアンケート項目に加えたところ、満足度としては予想よりも低い数値とはならなかった。来館者の半分超が自家用車を利用するなかで、横浜横須賀道路の馬堀海岸インターチェンジが20年度末に開設され、車でのアクセスが向上したことが反映していると考えられる。しかし、この現状に甘んじることなく、公共交通機関についても案内の改善、広報の努力を続けることで、潜在的来館者層の掘り起こしをはからなくてはならないと認識している。

②質の高い展覧会の開催

a. 企画展集客率(企画展目的の来館者／サンプル数)

【1次評価】

	21年度(1月末現在)	20年度	19年度
実績	60.0%*	52.2%	43.2%
評価	A	B	C

【評価指標】50%

A：60%以上

B：50%以上

C：50%未満

立派な展示でも長期間同じ内容では、複数回の利用は望めない。多くの方に継続的に利用していただくためには、質が高く、幅広い興味に対応した企画展を開催してゆかなくてはならない。足を運ぶきっかけとなるような魅力ある企画展となっているかについて、アンケートから分析すると、開館当初には、展覧会の内容にかかわらず施設や建物を見に来た、という来館者がある程度存在した。その傾向はしだいに薄れ、現在では企画展の性格が集客に直結する状況となっている。

21年度は、概ね指標に到達する結果となった。企画展別に見ると、特に知名度の高いパウエル・クレイ展(73.9%)がもっとも高い数値を示した。逆に、「コドモノクニ」展(48.1%)白髪一雄展(47.7%)は50%をやや下回った。季節的な特性として、企画展を目的としない観覧者が多い時期があり、そのため数値が相対的に抑えられたとも考えられる。

b. 企画展の満足度

【1次評価】

	21年度(1月末現在)	20年度	19年度
実績	73.5%*	76.0%	70.5%
評価	B	B	B

【評価指標】70%

A：80%以上

B：70%以上

C : 70%未満

質の高い展覧会となっているかについての指標。20年度は各企画展がそれぞれほぼ70%以上の満足度を維持して、好結果となった。21年度については展覧会によってばらつきが見られるものの、全体としては70%を超えている。

c. 所蔵品展の満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	62.1%	60.1%	65.8%
評価	C	C	C

【評価指標】70%

A : 80%以上

B : 70%以上

C : 70%未満

作品選択に制約のある所蔵品展だが、マンネリに陥るのを防ぐため、テーマや作家別の小特集を設けるなどして、新鮮な展示となるよう工夫している。21年度は新しい試みとして、借用作品を加えた特集展示を第2期に行った。しかし、満足度の数値には反映されにくいのが現状である。

d. 谷内六郎展の満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	75.2%	77.3%	86.9%
評価	B	B	A

【評価指標】70%

A : 80%以上

B : 70%以上

C : 70%未満

非常に高い満足度を記録した初年度に比べるとやや低落傾向にあるとはいえ、開館 3 年目を迎える現在でも安定した数値を示している。年齢を問わず受け入れやすい作品の性格が、高い満足度につながっていると考えられる。

e. リポート率(複数回来館者／回答者)

【1次評価】

	21年度(1月末現在)	20年度	19年度
実績	33.6%	27.5%	20.5%
評価	C	C	C

【評価指標】50%に近づける

A：45%以上 55%未満

B：40%以上 60%未満

C：40%未満 60%以上

リピーターの増加は、美術館が地域社会に根をおろし、地域住民の生活の一部となりえているかどうかを端的に示す指標である。当然ながら開館当初はほとんど存在せず、年を重ねるごとに多くなると予想されるため、指標をやや高めに設定している。いっぽうで、リピーターしか足を運ばない美術館は、一部の人にのみ奉仕する閉ざされた施設となってしまふ。当館の観光施設の性格を考えても、リポート率が極端に高まることは避けるべきで、つねに新規来館者の開拓につとめたい。

③やすらぎの場の提供

a. 館内アメニティ満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	88.8%	未調査	未調査
評価	A	—	—

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

来館者を迎え入れ、気持ちのよい時間を過ごしていただくことができているかをはかる指標として、21年度からアンケート項目に館内の快適性をはかる質問を加えた。結果としてはかなり満足度は高かった。建物自体が持つさわやかで清潔な印象に加えて、清掃が行き届いている点が評価されている。逆に、休憩所（イスが少ない、飲食できる場所がない、など）やトイレ（狭い、使いにくい、場所がわかりにくい、など）などについては不満を感じている人の割合が比較的高い。ハードにも関わることであり、早急な改善は望めないが、長期的な課題として認識している。

b. スタッフ対応の満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	78.8%	69.6%	78.9%
評価	B	C	B

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

受付や展示監視に従事するスタッフは、来館者とじかに接しているため、クレームの対象

となりやすい。対応が悪いとのクレームは開館当初から多く見られ、数値上 2 年目には悪化するという状況であった。しかし、請負業者の自助努力や、館内における情報の共有化の促進によって日々改善の努力を続けており、21 年度現在は満足度の数値も一定以上の水準に達してきている。

c. ミュージアムショップの満足度

【1次評価】

	21 年度（1 月末現在）	20 年度	19 年度
実績	58.6%	85.4%	未調査
評価	C	A	—

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

回答数自体が少なく、もともと関心のない人も多いことがわかる。関心を持って見る人の期待にはさまざまなものがあり、同じことが評価されたり批判されたりする（価格設定、品ぞろえなど）ため、アンケートから方向性を見出すことは困難。接客の向上、より多種のオリジナルグッズの開発などが課題として考えられる。

d. レストランの満足度

【1次評価】

	21 年度（1 月末現在）	20 年度	19 年度
実績	63.0%	67.6%	未調査
評価	C	C	—

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

付属レストランは美術館を訪れる人にとって休息の場であるばかりではなく、非日常的な

ゆったりとした時間を楽しむための重要な施設である。横須賀美術館では、イタリアンレストラン「アクア・マーレ」に、地元三浦半島の食材を生かした食事を提供していただいている。満足度調査では、満足と不満の差がはげしいことが特徴。満足の理由としては、質の高い食事のほかに景色がよいことが挙げられている。不満の理由には価格設定が高い、接客がよくない、といったもののほか、混雑時に長時間待たされる、入れない、など利用したくてもできないケースが目立っている。開館当初と比べてかなり減ったものの、休日のランチタイムには混雑するケースがある。席数についてはハードの問題であって改善が困難であるので、接客の工夫によって改善をはかってほしい。

e. 図書室の満足度

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	66.3%	68.6%	未調査
評価	C	C	—

【評価指標】 70%

A：80%以上

B：70%以上

C：70%未満

美術史家・故匠秀夫氏の蔵書を軸に、新しい美術館としては充実した美術図書資料を有しており、開館中を通じて来館者の利用に供している。不満とする理由に目立ったものはないが、利用者の絶対数が少ないためもあって、満足度としては十分な数値が出ていない。一般の利用を促すような工夫が今後の課題といえる。

f. 観音崎公園への滞在時間平均

【1次評価】

	21年度（1月末現在）	20年度	19年度
実績	2.58時間*	2.64時間*	未調査
評価	C	C	—

【評価指標】 3時間

A：3.5時間以上

B : 3 時間以上

C : 3 時間未満

観音崎観光の拠点施設、「滞在型の美術館」として機能しているかを測ろうとする指標。現在、アンケート回答者のほとんどは「2 時間」「3 時間」と回答し、あわせて全体の 64.7% *を占めている。「4 時間」以上と回答する人はあわせて 18.2% *に過ぎない。この値を見る限りでは、美術館への来館者の半数以上は、美術館のみを利用して帰途に着くと想像される。この値を向上させてゆくには、美術館をさらに休憩しやすい場所にしてゆく必要があることはもちろんだが、多くの来館者がかなりの時間をかけて来館しながら、日帰りしている状況では限界がある。美術館自身の努力以外に、外的な要因、たとえば周辺諸施設の整備、特に、飲食、休憩、宿泊施設の拡充が望まれる。

④知的好奇心の育成と充足

【評価指標】

- ・収蔵作品を中心とした専門的な調査研究や美術館活動に関する研究を行い、その成果を積極的に来館者に還元している。
- ・美術作品との出会い、美術作品を通じた市民どうしのコミュニケーションを促している。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a.企画展・所蔵品展・谷内六郎展の開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

[企画展]企画展は、子どもが親しみをもちやすいもの、海外の美術、あまり知られていない作家を紹介するものなど、幅広い層に訴えるためのバランスを考慮しながら企画している。21年度は、下記の6本を開催した。

「花—美と生命のイメージ」(単独自主企画展)

「手のひらのモダン—「コドモノクニ」と童画家たち」(単独自主企画展)

「パウル・クレー 東洋への夢」(巡回展・千葉市美術館、静岡県立美術館と共催)

「白髪一雄展 格闘から生まれた絵画」(巡回展・尼崎市総合文化センター他と共催)

「児童生徒造形作品展」(横須賀市造形教育研究会と共催)

[所蔵品展]所蔵品展は年4回展示替えを行っている。マンネリに陥りがちな所蔵品展であるが、作家の小特集や特別展示を行って変化をつけ、つねに新鮮な展示となるように工夫を重ねている。21年度の特集展示は下記の通り

[第1期]特集:嶋田しづ／朝井閑右衛門と物語の主人公たち／小特集:中西利雄

[第2期]特集展示:滝波重人

[第3期]特集:清宮質文の木版画／人物像／朝井閑右衛門と愛蔵の陶磁器

[第4期]特集:飯塚鈴児の童話挿絵／東京の風景／朝井閑右衛門と田浦

[谷内六郎展]谷内六郎館では、代表作である週刊新潮の表紙絵を開館以来1年分ずつ紹介

している。今年度は、1968年から1971年までを展示した。また、それぞれの年の谷内の活動にちなんだ作品や資料の展示をあわせて行っている。

〔第1期〕〈週刊新潮 表紙絵〉1968

〔第2期〕〈週刊新潮 表紙絵〉1969／週刊新潮 700号記念公開製作／1/5展

〔第3期〕〈週刊新潮 表紙絵〉1970／北杜夫との仕事

〔第4期〕〈週刊新潮 表紙絵〉1971／週刊新潮 800号記念公開製作／テレビ出演／観音崎一日灯台長

以上年間14本の展覧会を企画し、実施している。開催にこぎつけるだけで手一杯であった開館当初と比べれば、準備段階でのつまづきが少なくなり、その分内容や展示について質を高めるための工夫に力をさくことができるようになった。しかし、いまだ試行錯誤の段階にあることは変わりがない。横須賀美術館ならではの独創的な企画をいかに作ってゆくかを今後の大きな課題としたい。

b. 講演会・アーティストトークなどの開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

展覧会関連の教育普及事業として、外部講師を招いて講演会を開催している。今年度の実施内容・講師は下記の通り。

アーティストトーク・須田悦弘〔花展〕

路傍の花を描くーもうひとつの植物画の系譜 寺門寿明(水戸市博物館長)〔花展〕

童画のポップ・ステップ・ジャンプ 小野かおる(絵本作家)〔コドモノクニ展〕

ドイツ近代の画家たちと浮世絵 西村勇晴(美術史家)〔クレー展〕

パウル・クレーも魅了された『北斎漫画』 小林忠(千葉市美術館長・学習院大学教授)〔クレー展〕

白髪一雄 人と芸術 平井章一(国立新美術館主任研究員)〔白髪一雄展〕

ワンダーシニア 30展講演会① 島田章三(出品作家・横須賀美術館長)

ワンダーシニア 30展講演会② 堺屋太一(経済評論家)

ワンダーシニア 30展講演会③ 吉田喜重(映画監督)

アーティストトーク・滝波重人〔所蔵品展〕

六郎さんの宇宙 天野祐吉(コラムニスト)〔谷内六郎展〕

やや専門的な内容についてお話いただくことによって、展覧会の内容についてより深く理解することができ、知的好奇心を満たす機会となっている。

c. 一般向けワークショップなどの開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	A

展覧会に関連するワークショップのほか、やや高度な技法に挑戦する「オトナ・ワークショップ」、すぐれた映画作品を紹介する「シネマパーティー」などの事業を継続的に実施しており、特色ある企画として定着しつつある。今年度の実施内容と講師は下記の通り。

花を描く—新しい技法に挑戦 小山利枝子(画家)[花展]
 へんてこおぼけ大集合 tupera tupera(絵本作家、イラストレーター)(コドモノクニ展)
 鉛筆で描く水墨画 フジイ・フランソワ(画家)[クレー展]
 ひもで、せんを、むすぶ。 倉科勇三(造形作家、園田学園女子大学講師)[白髪一雄展]
 みたてたできた〇〇みたい 後藤盾比古(造形作家)[児童生徒造形作品展]
 ROKURO こけし教室—谷内六郎とこけしのすてきな関係 沼田元気(芸術家・写真家・詩人)[谷内六郎展]
 こどもワークショップ 大きな写真に絵を描こう！ 福田利之(イラストレーター)
 春のシネマパーティー「のんき大将」キノ・イグルー(シネクラブ)
 オトナ・ワークショップ 混合技法—水と油が手をつなぐー 滝波重人(美術家)
 夏の野外シネマパーティー「マイ・シスターズ・キッズ」キノ・イグルー(シネクラブ)
 Goma のフカフカパンくっしょんをつくろう！ Goma
 オトナ・ワークショップ カタカタのカタゾメフロシキ kata kata(染色作家)
 未就学児ワークショップ ねんどであそぼう！ オガサワラマサコ(美術家)

ほぼ毎回応募者が定員を上回っており、ニーズの高い事業といえる。しかしながら、きめ細かい対応が必要であることや、スペースの都合から、こうした事業ではなかなか定員を増やすことが難しい。21年度は実験的に野外スクリーンでの映画上映会を行い、多数の方に楽しんでいただいた。

d. 学芸員によるギャラリートークの実施

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

企画展ごとに、担当学芸員によるギャラリートークを行っている。他の関連事業と重ならない範囲で行うため、会期中 3 回から 4 回程度、隔週で週末に行うのが通例となっている。チラシや HP、広報などで告知するため、これにあわせて観覧される方も多し。そのほか、要望に応じて団体観覧者などへのガイダンスを行っている。

e. 学芸員による論文等の充実

【1次評価】

	21 年度
実績	(別紙資料)
評価	C

学芸員による執筆活動は、現状では量的に見て多いとはいえない。また、概説や一般論的なものばかりでなく、より独自性のある研究が期待される。

⑤福祉活動の展開

【評価指標】

・年齢や障害の有無にかかわらず、すべての人が充実した時間を過ごすための環境づくりを積極的に行っている。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a. 福祉とアートをテーマとした講演会の開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

視覚に障害のある人にとっての美術鑑賞のあり方についての講演会を継続的に行っている。21年度はほかに、トヨダヒトシ氏によるスライドショーを行った。このイベントではとくに聴覚障害者へ告知を行い、一部手話通訳を実施した。

b. 障害児を対象としたワークショップの開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	A

「みんなのアトリエ」として、障害児を対象とした造形ワークショップを年12回開催している。回ごとに素材や技法に変化をつけ、造形の楽しさを実感できるよう工夫しており、参加者から好評を得ている。当面現在の実施方法を継続していきたいと考えている。

c. 障害者施設(対話鑑賞)、高齢者施設などの受け入れ

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

障害者、高齢者の団体に対して、必要に応じてなるべく不便のないように配慮し、場合によってはワークショップ室などの場所を提供している。とくに、市内外の養護学校については、要望に応じ協力して造形ワークショップを行っている。

視覚障害者への対話鑑賞については、21年度は実施の機会がなかった。受け入れを行っていることの周知をはかるいっぽう、少ない機会をとらえて職員のスキルを向上させてゆくことも課題である。

d. 託児サービスの実施

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

定期的、あるいはイベント開催時に合わせて、年間24回の募集を行っている。利用者にはよこばれており、リピーターもいる。潜在的なニーズは高いと思われるが、応募者が少なく、実施に至らないケースが多いことが課題。さらに周知につとめる必要がある。

⑥学校との連携

【評価指標】

- ・教師との緊密な連携によって、児童生徒にとって親しみやすい鑑賞の場を提供している。
- ・鑑賞の場としてはもちろん、社会見学そのほかの美術以外の分野でも協力関係がもたれている。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a. 児童生徒造形作品展の開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

市立の小中高校、幼稚園の児童生徒の作品展。文化会館で開催されていたが、20年度より会場を美術館に移した。展示・撤収作業は各校の教諭と美術館職員が協力して行っている。子どもたちの造形教育にとって貴重な発表の機会であるばかりでなく、ふだん美術館を訪れる習慣のない層にとっても来館の動機となりやすい展覧会であり、市民に親しまれる美術館となっていくためにも大きな役割を果たしている。昨年度の会期は11日間で、週末が1度しか含まれていなかったが、今年度は要望に応えるかたちで18日間に拡大した。

b. 小学校美術館鑑賞会の受け入れ

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

全ての市立小学校の6年生を対象として、鑑賞会を行っている。受け入れには学芸の担当者とボランティア（サポートボランティア）があたり、館内でのルールの説明や鑑賞の手助けをしている。大人数での来館のため、きめ細かい対応には自ら限界があるが、ワークシートなどを活用して、多くの子どもたちに美術鑑賞の楽しさを伝えられるよう努力して

いる。事業目的について先生方の理解を得ていくことが長期的な課題。

c. 中学生のための美術鑑賞教室の開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

応募者を対象として、中学生のための美術鑑賞教室を行っている。学年全員を招待する小学校の鑑賞会と異なり、興味のある生徒が応募するので、よりきめ細かい対応が可能。学校だけでは行いにくい鑑賞教育の実践する場となっている。

d. 研修等(職業体験、インターンシップなど)の受け入れ

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

21年度は、中学生の職場体験、博物館学芸員資格取得のための学芸員実習の受け入れを行った。それぞれの段階に応じて、充実した実習となるようプログラムを工夫している。

⑦市民との協働

【評価指標】

- ・美術館の事業への市民参加の機会が十分に確保されている。
- ・ボランティアの主体性が尊重され、やりがいをもって活動している。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a. サポートボランティアの活動状況

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

美術館の事業をサポートするサポートボランティアは現在9名が活動しておられ、毎週日曜日に行う所蔵品展ギャラリートークや、小学校美術館鑑賞会の受け入れ補助などの活動をしている。隔週で研修会を行い、知識や技術の向上に努めている。

b. プロジェクトボランティアの活動状況

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

美術館を盛り上げるワークショップ・イベントを企画し、実施するプロジェクト・ボランティアは現在およそ13名が中心となって活動している。21年度は夏休み（爆裂色四舞鬼）とクリスマス（海の広場のメリークリスマスⅡ）にイベントを実施し、子どもたちを中心に大勢の人に参加していただいた。企画の内容は、隔週で開かれる会議において、ボランティア同士の話し合いで決められている。

⑧子どもたちへの美術館教育

【評価指標】

- ・コミュニケーションを通じて美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供している。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施している。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a. 子ども向けワークショップの開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	A

21年度は1月までに6回（展覧会関連事業4回を含む）の子ども向けワークショップを開催した。子どもたちにとって新しい手法に触れる機会となることはもちろんだが、自由な発想を持つ子どもたちとともに制作することが、講師や付き添いの大人たちにとっても新鮮な体験となっている。応募者が定員を上回るケースがほとんどであり、学校を離れての造形体験の場としての認知が定着している。託児サービスと併用することによって、ふだん下の子にかかりきりの親と、年長の子のコミュニケーションがはかれることも効用の一つとなっているようである。そのいっぽう、3月には初めて未就学児向けのワークショップを行った。

b. アーティストと出会う会の開催

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	A

将来美術関係の職を志望する中高生を対象にアーティストと出会う機会を提供する事業。21年度は中川久、黒井健の両氏を講師に迎えて2回実施し、あわせて70名の生徒が参加

した。今後も生徒の世代にとって魅力ある講師を委嘱すること、また、より多くの生徒にとって参加しやすくなるよう、開催時期の検討も含めて学校側との連携を深めることが運営上の課題。

⑨すぐれた美術品の収集・保管

【評価指標】

- ・収集方針に基づき、すぐれた作品を収集し、適切な管理をしている。
- ・所蔵作品が館内ばかりでなく、ひろく価値を認められ、活用されている。

A：指標より高いレベルに達している

B：指標を満たしている

C：指標を満たしていない

a. 作品収集の状況

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	C

すぐれた美術作品を収集することは、美術館にとって基本的で最も重要な役割のひとつであるが、市の財政事情から当館では19年度以来作品購入費が計上されていない。したがって収集活動は善意の寄贈や寄託に支えられている状態である。21年度は、作品42点、資料3件の寄贈、作品9点の寄託があった。購入費のない中での収集としては一定以上の成果を挙げたものと評価したい。しかしながら、能動的かつ機動性のある収集活動のために、少額でも作品購入費を確保することは今後の継続的な課題といえる。

b. 保存・修復の状況

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	B

作品保存の観点から、収蔵施設内の環境調査を年2回実施している。寄贈作品（伊藤久三郎など）7点の修復のほか、既存作品などの額装を行った。寄贈作品のなかには、経年劣化などでそのままでは活用できない状態のものも多い。また、作品そのものの修復でなくても、作品の保全（不適切な固定方法の変更、酸による劣化を防止するための裏板交換など）のため、あるいは展示効果の向上（映りこみ防止のために画面を

保護しているガラス板を低反射アクリル板に交換するなど) のために額装を改善することも積極的に行っている。

c. 所蔵作品の貸出状況

【1次評価】

	21年度
実績	(別紙資料)
評価	A

21年度は他美術館の企画展などに計15件、103点の館外貸出を行った。高崎市美術館の谷内六郎展に際して館蔵の78点を貸し出したことから、件数に比して点数が多くなっている。貸出には集荷・返却時の立会い他事務的な作業などがともない、さらに額装などの作業が発生する場合もあり、かなり負担となる。逆に、当館で開催する企画展に際しては、他の館にそうした負担をかけているわけである。あるテーマに則した企画展で展示されることで、所蔵品の本来の、または意外な魅力が発見されることがあり、また、遠方の美術ファンに横須賀美術館を知っていただくきっかけとなることもある。借用依頼件数の多さは、当館のコレクションへの注目度の高さを証明しているといえる。